

心理性と社会性



波多野完治

坂元先生から講演を頼られました時、アメリカへ調査のため行く予定がありました。もし間に合ったら講演をするという事で最終日にしてもらいました。題も、坂元先生と私どちらがやってもいいような題にしようと二人で相談しまして、「心理性と社会性」としたわけでございます。

私は心理学で社会学に非常に近い仕事をしております。坂元先生は社会学の出身ですが心理学的に仕事をずっとやってこられたので、二人の考えは大へんちかいです。

わたしの考えていることを皆さんにお話しすると共に、坂元先生にも聞いていただき、あとで坂元先生の感想をお聞きできたら、さいわいと思えます。

この研究会は倉橋先生にいわれておつきあいをしはじめてから二十年になりますが、その後、及川ふみ先生、菊池先生

にも大へん大事にさせていただき、わたしとしても楽しく教えられることが多かったのです。

わたしは幼児教育の方が必ずしも専門というわけではないのですが、精神発達の理論というものを中心に話せばいいということだったので、そういうつもりで素人の幼児教育論をばなして、二十年やってきました。

さて、二十日程の外遊中に幼稚園を二つばかり拝見しましたが、今までと変わったことを教えられるということはありませんでした。前々回アメリカへ行きました時と同じ所へいったのですが、児童画の先生で子どもの絵のことを心理学から研究してアメリカでは第一人者のハリスさんがこの秋から、お茶の水女子大学へきて下さるのですが、来年の二月には帰られてしまいます。その先生にお目にかかったのです

が、この前の時はペンシルベニア州立大学の幼稚園を見せてもらい、お話をきかせてもらい大へん参考になったんですが、今度は話しただけで帰ってきました。

それで、大した新流派というわけではありませんが、カソリックの学校の幼稚園とハワイのカメハメハ学園のことをお話しします。カメハメハ学園は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校があります。学校へ入る資格はハワイの原住民の血がまじっている人です。日系ハワイ人もかなり入っていました。

その幼稚園でI T Aというのをやっているんですね。これは十年前、イギリスで始まったアルファベットで、子どもが字を覚えるのに英語のつづりは難しい、そこで一字一音のアルファベットをこしらえました。

これは全部で四十五文字ほどになるのですが、なにしろ、一字一音ですからこれで教えると非常に早いです。それがアメリカへわたり普及していることは知っていました。I T Aでやると幼稚園でも教えられる。絵本に変な字で話しがかいてある。これがI T Aで幼稚園と一年生をこれで教え、二年から普通のいきりかえていくのです。

昔は日本はカタカナを教えるから平がなを教えました。それと同じことをアメリカでやっているんですね。今は、平が

なで始めからやっているんです。日本はカタカナ生習をよしちゃったんです。このように幼児に字を教える試みがアメリカでもやられていて、その一つがI T Aです。

昨年やはり、この研究会で口をきくタイプライター、つまりトリーキングタイプライターを使って字を教えるという話をしました。これだと三歳から字が教えられ、四歳なら自由に読んだりかいたりできるということが実験されているという話をしましたが、その動きは、今でもかなり行なわれているようです。

そこで、幼児の知的教育がどう進んでいったらよいかという問題があると思います。ちょうどこんなことを考えている時、ニューヨーク・タイムスの五月二十六日の付録にピアジェのカラーの写真がでていてピアジェのことをくわしく紹介してありました。

表紙に「ピアジェの影響はフロイトと同じ位大きい」と書いてあるのです。そこでピアジェが幼稚園の早教育をどう考えているかを簡単にお話することにします。ピアジェの考えをピダット・エルキンドという人がかいています。この人はピアジェの心理学の発展を三つの時期に分けています。私はちょっと違うのですが、まずエルキンドの説を述べましよう。

第一の時期は、一九二二年から一九二九年まで、子どもの道徳判断という本がでたときを第一の時期とします。「児童の言語と思考」「判断と推理」「世界観」「物理的因果」第五番目が「道徳判断」です。第一の時期は、五歳から九歳頃の時期をより良く研究した時期です。

第二の時期を一九四〇年までとし、この時期にピアジェは「児童における知能の誕生」その次が「児童における実在の構成」それから「児童における模倣と遊び」そして、「数の概念」主に、生まれてから二歳までを一番中心に研究しています。第一期は、言葉でどういう返事をするかという中心に研究したんですが、第二期は行動を中心に数や論理がどれだけわかって行動するかということを研究しています。それから一九四〇年から一九六八年を第三期としています。わたしはここがちょっと具合が悪いんじゃないかと思いますが、第三番目の時期は、主に子どもの論理を追っていた時期だとエルキンドはっています。

私の評価ですと、第二期の「子どもの模倣」というのが一九四五年にできています。これを一九四〇年に入れて考えるのは無理じゃないかと思えます。それから第三期に二十八年間というのを放りこむのは無理だと思えます。

私の考えでは第三期と四期を分けるか、あるいはもっと別

の仕方にした方がいいのではないかと思います。で、わたしの分類はこうです。一九五〇年にピアジェが千ページの本を書いています。数学、物理学、生理学、心理学、社会学の認識論的な構造を研究したものです。認識というものがどうしてできるのかということの研究するためには、発生的方法、子どもがどうして認識するようになったかを主に研究しなければうまくいかないということを書いた本ですが、この大冊を全部理解することはむずかしい。

そこでピアジェは自分の考えを八十ページ程にまとめた小さな本をだしているのです。それが一九五〇年、それ以来ピアジェは認識論の問題を心理学的な方法で説明しようということに本格的にのりだしたのです。一九五四年から五年間、ロックフェラーのお金をもらって論理が幼児の時はどうなっているかということの研究したのです。そうしますと、第二期を五十年にして第三期を現代までということにしたらどうか、とわたしは考えています。

ピアジェはいままで学問とは関係ないといわれていた子どもを学問にとり入れたのです。子どもが大へん好きで、去年クラーク大学によばれ講演をしたとき、こういうことがありました。一九〇九年同大学でフロイトの講演も行なわれた所ですが、ピアジェは長いこと不遇な学者であったので、講演が

うまくできるかどうか心配そうにしていたのです。ごはんを食べる時も緊張していました。

ところが子どもが三人ほど室の外に現われ、ピアジェが子どもの方へあいさつしたところ、子どももピアジェにあいさつを返しました。その後、ピアジェはみちがえるように元氣になり、講演も大成功でした。というエピソードをエルキンドはかいています。ピアジェは、幼児を手がかりとする心理学、論理学、認識学をやったのです。幼児の知性の働きを知ろうと思ったらピアジェに教えられることが多いのではないかと思います。

これからピアジェの発達に関する基本的な考えを述べ、早期教育とどう関連しているかお話ししたい。第一に赤んぼの時代をとばして幼児に行くことはできないので、前の時代をちゃんとやらないと後の時代に行くことはできないということを主張しています。

猫は生後三か月になると物を見て役に立つかわかりません。子どもだと八か月かかるのに、猫だと三か月でよい。

しかし、子どもはもつと先へいけるのです。ですから早くその段階を卒業するのはいいことではない。時間がかかっていることは意味があることなんです。しかし、ピアジェの影響を強く受けたブルーナーは、幼児のやっている正しい勉

強、認識の方法も、おとながやっている正しい方法も同じだといったんです。だから、うまい方法さえ使えば幼児に正しい科学、認識を教えることができるんだという理論をたてた。これが、大へんなセンセーションをまきおこしました。

ピアジェは、アメリカで実際に早期教育を見て、心配しました。他のことがおろそかになってやしないか、例えば、石ころが亀だといって喜ぶ子どもらしいシンボリズムなどを無視した教育は変だ、というのです。これは発達段階的な時間というものが、どんなに大切かということを教えています。

発達のためにつかわれる時間は無駄ではないのだとして、時間是非常に大切だといっています。

アメリカの今までのやり方に対してピアジェがおかしい、他の段階をとばして教えるというのは、かえって、その子どもの成長を止めることになるといったことは、意味があると思う。成長をその時期において充実させていくことを研究したのは、実に意義のあることです。むりに強制するような教え方は、いけない。ある人は、黒人の子どもは無理におとなにさせられているので、おとなになって成長がとまっているといっています。幼児の生活を充実させることに本当の幼児教育があるのだという考えをしっかりと頭に入れていただきたいとおもいます。